

## ◆ 部門活動紹介

### 事業化推進部門 ワーキング担当 三上靖彦



## 「ソーシャルビジネス提案コンテスト」創設ワーキングが発足

ソーシャルビジネス、それはつまり、「社会的課題の解決を図るための取り組みを持続可能な事業として展開すること」。

それはCNC P並びにその会員が取り組むべき事業そのものである。このような事業をそれぞれが展開することで、CNC Pとその会員の社会的存在意義が高まり、会の設立趣意書にもある「行政や企業、教育・研究機関、そして地域・市民組織とのパートナーシップを通じて、より良い地域社会の構築を目指す」ことが可能となるはずだ。

しかしソーシャルビジネス、まだまだ馴染みのない言葉だ。

そこで平成27年2月6日（金）、「ソーシャルビジネス提案コンテスト」創設に向けたワーキングのキックオフミーティングが開催された。公募によるメンバーは、山岡和彦さん（美し国づくり協会・日本電通株）、和田恵さん（日刊建設通信新聞社）、小松崎暁子さん（株ケイズプラン）、中島満香さん（プライスウオーターハウスクーパーズ株・ソーシャルベンチャーパートナーズ東京）、星野隆幸さん（宮崎CALSネットワーク）、そして三上靖彦（茨城の暮らしと景観を考える会・株ミカミ）の6名。早速議論が始まった。

まずは現状認識から。

- ・社会にシビルNPOが認知されていない。
- ・有償での活動が出来ていない。日本の風土には事業型NPOが馴染んでいない。

このような事情を大きな問題として捉えなければ、社会的課題に対応したビジネスは前に進まない、との意見が出された。

そのような指摘を踏まえ、考え方の基本に関わる意見が示された。

- ・WIN-WINの思想が必要だ。
- ・事業型NPOを認める社会風土に変えて行くことが必要だ。
- ・事例としての視野を国内だけではなく海外にも向けて行くべきだ。

ここで、事業の目的も含め、議論は振り出しに戻った。

- ・そもそも、「コンテスト」というネーミングが既に先入観がある。
- ・当初の事業としては、事業型のシビルNPOの活動例を調査してみよう。
- ・そして、優れた事業型NPOの活動を、CNC Pとして一方的に称えてはどうか。
- ・このような事業を何回か重ねてゆき、知名度アップ、普及につなげよう。
- ・そして次のステップとして、全国公募によるコンテストに移行していったらどうか。

短い時間ではあったが、かなり密度の濃い議論が出来た。今後、毎月一回のペースで会議を重ね、出来るだけ早く具体的な形にしてゆきたい。

次回、3月20日のワーキングでは、昨年暮れに発刊された『インフラ・まちづくりとシビルNPO—補完から主役の一人へ—』を参考図書とし、掲載されているソーシャルビジネスの具体例をもとに、協議を進める予定である。

